

人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行っていたステパノは、リベルテンの会堂に属するユダヤ人たちに襲われ、捕らえられることで、強制的に議会へと連れて行かれました。そして、彼らの立てた偽りの証人たちによって、聖なる所（神殿）とモーセの伝えた慣習（律法）を汚す者として訴えられたのです。そんな状況の中で、ステパノは御使いのような顔でメッセージを語るわけですが、今日はその続きを見ていきます。

ステパノは、メッセージを語るにあたり、ユダヤ人たちの訴えの中心であったモーセではなく、彼よりも四百年以上前のアブラハム、つまり、彼らが自分たちの父祖と呼ぶ存在から始めることで、聖なる所や律法が最初ではなく、すべてはアブラハムに対する神様の約束から始まったことを告げているのです。神様は、アブラハムに「この地をあなたとその子孫に財産として与える」と約束されましたが、その通り、彼にイサクを、イサクにはヤコブを、ヤコブには十二人の族長たちを与えることで、ご自身の約束を実行されました。

そして、今日の箇所においても、アブラハムに語っておられた「彼の子孫が、外国に移り住み、四百年間、奴隷となり、虐待される。…彼らを奴隷とする国民は、わたしがさばく。その後、彼らはのがれ出て、この所で、わたしを礼拝する」ということばを実現へと至らせるために、神様は、モーセという人を用いられるのです。今日の箇所には、彼が生まれた時の背景や生い立ち、40歳の時に彼が試みたこと、またその40年後に、彼が神様によって、イスラエルの支配者また解放者として遣わされたことが記されています。

17-19 節「神がアブラハムにお立てになった約束の時が近づくにしがって、民はエジプトの中にふえ広がり、18 ヨセフのことを知らない別の王がエジプトの王位につくときまで続きました。19 この王は、私たちの同胞に対して策略を巡らし、私たちの父祖たちを苦しめて、幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました」。

まずここで確認しておきたいこと、それは「イスラエルの民を奴隷にし、彼らを苦しめたのは、神様ではない」ということです。そうしたのは、偶像の神々に仕えるエジプト人であって、彼らの王、パロがイスラエルの民を虐待しました。なかには「もし神様がそうなることを予め知っておられたのなら、なぜ神様は、ご自分の民が苦しまないように彼らを助けなかったのか？」と考える人もいることでしょう。

でも、いつの時代も、どこにおいても、人を苦しめるのは神様ではなく、人です。その内側に自己中心性、つまり、罪をもつ人間が、その欲に導かれるままに歩むことで、他者を傷つけるのです。そして悪魔は、人が互いに苦しめ合うことを喜ぶゆえに、さらなる誘惑をもって攻撃してきます。ですから、この時も、イスラエルの民を苦しめていたのは、エジプト人であり、彼らの王、パロのもとで虐待は行われていました。

では、なぜパロは、イスラエルを苦しめたのでしょうか？なぜ自分では何もできない幼子（男の子）を捨てさせたのですか？エジプトでイスラエルの民が増え続け、いよいよ強くなることに恐れを覚えたからです。つまり、最初は、ヨセフとその家族しかいなかった彼らですが、およそ四百年の間に、その数は、成人男性だけで六十万人、女性や子どもを入れると二百万人はいたと推測されるほど、彼らは増え広がっていました。ですから、彼らがエジプトにとって脅威となる前に、彼らを奴隷にし、力で押さえつけることが得策だとパロは考えたのです。だから、幼子たちを捨てさせました。モーセは、そのような時に生まれたのです。

20-22 節「このようなときに、モーセが生まれたのです。彼は神の目にかなった、かわいらしい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、21 ついに捨てられたのをパロの娘が拾い上げ、自分の子として育てたのです。22 モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました」。

イスラエルの民を内心恐れて、彼らの幼子たちを捨てさせたパロですが、皮肉なことに、彼の娘が、後にイスラエルの指導者となるモーセを川から拾い上げ、自分の子どもとして育てるのです。もちろん、そこには神様の摂理の御手があったわけですが、そのようにしてモーセは、いのち救われるだけでなく、エジプト人の最高の教育を受けて育つことになります。そして、ことばにもわざにも力ある者として成長するのです。

23-29 節「四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。24 そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の仕返しをしました。25 彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。26 翌日彼は、兄弟たちが争っているところに現れ、和解させようとして、『あなたがたは、兄弟なのだ。それなのにどうしてお互いに傷つけ合っているのか』と言いました。27 すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけてこう言いました。『だれがあなたを、私たちの支配者や裁判官にしたのか。28 きのうエジプト人を殺したように、私も殺す気か。』29 このことばを聞いたモーセは、逃げてミデアンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけました」。

ことばにもわざにも力のある者として成長したモーセは、エジプトで奴隷となっていた同胞のユダヤ人たちを顧みる心を起こします。彼が40歳のころです。そして、自分の手によって彼らを救おうとするのです。ところが、人々は、モーセをそのような者とは認めませんでした。それもそのはず、この四十年後に、モーセは彼らをエジプトから救い出すこととなりますが、ということは、この時点でイスラエルの民は、すでにエジプトに360年ほど(400年から40年を引いて)いたこととなります。

もちろん、最初から奴隷であったわけではありませんが、この時の民は、彼らの両親や祖父母もみな、エジプトで生まれ育っていたわけです。ですから、たとえ奴隷のくびきの元で苦しんでいる現実があったとしても、そこにパロの娘の子であるモーセが突然現れ、自分たちを助けようとしても、そう簡単に彼を認めることなどできるはずがありません。そういう意味で、モーセがイスラエルの民に拒絶されたことは、当然といえば当然のことだったと思うのです。そのようにして民に拒絶されたモーセは、エジプト人を殺したこともあり、ミデアンの荒野へとのがれます。そして、そこで二人の子を授かり、四十年間を過ごすことになるのです。

物心ついた時からエジプトの王宮で、パロの娘の子として育ったモーセにとって、荒野での生活は、どのようなものだったのでしょうか？すぐに気持ちを入れ変えて、新しい生活になじめたと思いますか？その時のモーセの心情については、この所にも、また出エジプト記にも記されていないのでわかりません。でも、おそらく荒野での生活は、自我(プライド)の砕かれるものであったと思うのです。同胞から拒絶され、パロの娘の子という立場も失った彼は、自分が何者でもないことを、そこで思い知らされたのではないのでしょうか。でも、彼の人生はそこで終わりません。チッポラと結婚し、子も授かり、羊を飼いながら、その地で暮らすのです。

そして、30-34 節へと続きます。「四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山の荒野で柴の燃える炎の中に現れました。31 その光景を見たモーセは驚いて、それをよく見ようとして近寄ったとき、主の御声が聞こえました。32 『わたしはあなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』そこで、モーセは震え上がり、見定める勇氣もなくなりました。33 すると、主は彼にこう言われたのです。『あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたの立っている所は聖なる地である。34 わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。さあ、行きなさい(英語では come)。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。』」。

主の御声を聞いた時、モーセは震え上がりました。それ以外に、彼の応答はここには記されていませんが、出エジプト記を見ると、主の召しに対するモーセの応答が記されているのです。開きませんが、モーセは言いました。「私はいったい何者なのでしょう」「私はことばの人ではありません」「どうかほかの人を遣わしてください」と。つまり、主の召しに対して、彼は「自分がいったい何者なので、イスラエル人を救うことができるのでしょうか？私はことばの人ではないので、誰も私を信じないでしょう。どうか他の人を遣わして下さい」と。モーセは、荒野での40年の間、この瞬間を待ち望んでいたと思いますか？

もしあなたが指導的な立場にある人なら、このような消極的な人に、大切な仕事を任せますか？それが多くの人の命にかかわる仕事だとして、そのような大事な仕事を、こんな人にゆだねると思いますか？自信過剰な人もかなり危険ですが、でも、その反対に自信がなさすぎるのも困ったものです。でも神様は、ことばにもわざにも力があり、自分の手で民を救おうとした四十歳のモーセではなく、荒野での四十年を経て、「自分は何者なのか」と砕かれた八十歳のモーセを選び、イスラエルの支配者また解放者として遣わされました。

ステパノはこう表現しています。35-36 節「『だれがあなたを支配者や裁判官にしたのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は柴の中で彼に現れた御使いの手によって、支配者また解放者としてお遣わしになったのです。36 この人が、彼らを導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年間荒野で、不思議なわざとしるしを行いました」。

いかがでしょう？モーセをして、彼をイスラエルを救う者としたのは誰ですか？モーセ自身ですか？それは神様です。もし神様が、モーセを遣わすことがなければ、彼はどうなっていたでしょう？年老いてもなお、自分で何とか奮起することで、彼はかつて自分がしようとした同胞の救いに、再びチャレンジしたと思いますか？そして、その結果、彼自身の力によって二百万人もの人が、エジプトから救い出されたと思いますか？

そんなことできるはずがありません。彼を通して行われたエジプトへの 10 の災いにしても、それは偶像に仕えるエジプトに対する神のさばきであったわけですが、それを行う力などモーセにはありませんでした。ましてや、紅海を分けること、イスラエルの民を 40 年間も荒野で養うことなんて、ひとりの人にできるはずがないのです。でも、それらは実際にモーセを通して行われました。「彼が」ではなく、「彼を通して」、神様がそれを行われたからです。そして、それもアブラハムに対する神様の約束のゆえ、ということが出来ます。

ですから、モーセは、神様に用いられた尊い神の人です。私たちは彼から学ぶことは多くあります。けれども、40 歳の時のモーセのように、救いのわざを自分の力でしょうとしても、私たちにはできないのです。でも、荒野での経験を通して、自分が何者でもないと思わされたモーセに現れ、彼を召し出すことで、ご自分の民を救う働きへと遣わされた主を見上げるなら、主は私たちをご自身の栄光のために用いて下さるのです。

37-38 節「このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる』と言ったのです。38 また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです」。モーセのいう「私のようなひとりの預言者」とは誰のことですか？それは主イエスです。主イエスこそ、アブラハムの「その子孫」であり、まことの生けるみことばです。ご自分に聴く者にいのちを与え、約束の財産としての永遠の御国を相続させることのできるお方です。

皆さん、今日あなたは、この方に聴いておられますか？ステパノを訴えたユダヤ人たちは、主イエスを聖なる所をけがし、モーセの伝えた慣習を変えてしまう者として退けました。でも、モーセはこの生けるみことばである主イエスに聴きなさいと命じたのです。なぜなら、モーセは、エジプトで奴隷となっていたイスラエルの民を救うために、神様によって遣わされましたが、主イエスは、すべて罪と死の奴隷となっている私たち人類を救うために神様によって遣わされて下さいました。モーセは、神様に命じられた通り、子羊の血をもってイスラエルの罪を贖い、彼らを神のさばきから救い出しましたが、主イエスは、ご自身が世の罪を取り除く神の子羊となることで、十字架で流されたご自身の血をもって、私たちを罪と滅びから贖って下さったのです。

ですから、モーセを通して救い出されたイスラエルの民は、紅海を渡り、その後、荒野での生活を経て、約束の地へと導き入れられましたが、主イエスによって救われた私たちは、水の中、つまり、バプテスマを通して主と一つにされることで、この世の荒野におけるあらゆる困難の中でも、主イエスが聖霊とみことばをもって共にいて下さることで、それを乗り越えて行き、やがて約束の地、天の御国へと導き入れられるのです。聖なる神様は、ご自分の前でくつを脱ぐようモーセに命じられましたが、その名を呼んで私たちを救って下さった主イエスの前に、自らを低くし、進んでこの方のみことばに聴き従おうではありませんか。主イエスこそ、神様が私たちを救うために遣わして下さった救い主だからです。